

どもりながら生きる—吃音当事者と言語聴覚士の対話

Living with Stuttering: the Dialogue with a Speech-Language-Hearing Therapist

熊田 広樹* ・ 阿部 勇司**
Hiroki KUMATA ・ Yuji ABE

*旭川大学短期大学部幼児教育学科
**東神楽町・東川町子ども発達支援センター

Abstract

It is known that October 22 is International Stuttering Awareness Day. Every year various events related to stuttering are held all around the world on this day. The talk session between a man with stuttering and a speech-language-hearing therapist was held on October 10, 2022 at Higashikawa Town, Hokkaido, Japan. (organized by Kumata Seminar of Asahikawa University Junior College and also supported by Higashikawa Town and Higashikawa Town Board of Education) The dialogue of the session is reported on this article.

抄録

10月22日は国際吃音啓発の日として知られており、毎年世界各地で吃音に関する啓発のためのイベントが開催されている。これにちなみ、2022年10月10日に北海道東川町にて吃音当事者と言語聴覚士によるトークセッションを実施した（主催：旭川大学短期大学部熊田ゼミナール 後援：写真文化首都「写真の町」東川町、東川町教育委員会）。本稿では、その内容を報告する。

キーワード：吃音、国際吃音啓発の日、当事者、言語聴覚士、地域づくり

※本稿の第3章は、トークセッションを録音したものを文字起こしした上で読み原稿に直したものである。発言の要旨を損なわない程度に一部、文体や表現を修正している。また、吃音当事者の発言においては、実際は難発や挿入などの非流暢性が頻繁にあったものの、文字原稿としての読みやすさと発言内容を正確に伝えることを優先し、本人の了解を得てそれらを忠実に再現することは控えた。

1. はじめに

吃音 (stuttering) とは、話し言葉の流暢性に困難が生じる言語障がい的一种であり、DSM-5 (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders: 精神疾患の診断・統計マニュアル第5版) においては小児期発症の流暢症、ICD-10 (International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems: 国際疾病

分類第10版) においては吃音症として、医学的な診断基準や分類にも含まれている疾患である。代表的な症状としては、連発 (音を繰り返す)、伸発 (音を引き伸ばす)、難発 (つまって音が出てこない) の3つがある。吃音のある人は疫学的にはおよそ100人に1人いるとされ、そのほとんどは言語発達が著しく進む2歳から5歳の幼児期に発症する。発症後、学童期にか

けて自然に消失していく場合もあれば、成人期まで症状が続く場合もあり、女児よりも男児に多い。医学的な原因が明らかになっておらず、根本的な治療法はまだ存在しないが、様々な臨床的な知見から吃音を改善させる要因や悪化させる要因が少しずつ明らかになりつつある。しかし、それらを全ての吃音のある人に一般化して適用することは難しく、症状の現れ方には極めて個人差がある。

一方、障がいの社会モデルに基づき、吃音があってもその人らしく生きていくことができるような社会環境の整備も求められている。障害者差別解消法に基づく合理的配慮の提供もその一つであり、学校教育や就職支援等における理解や啓発も少しずつ進んできている。しかし、吃音に対する根強い偏見や差別も未だ存在しており、吃音の臨床を行っている医師や言語聴覚士も極めて少ないという現状がある。そのような中で、改めて今、社会における障がいへの正しい理解が求められている。

そこで、短期大学による地域貢献の一環として、10月22日の国際吃音啓発の日になんで吃音に関する社会への理解・啓発を促すことを目的としたイベントを開催することにした。言語聴覚士である筆者が、吃音当事者を迎えてト

ークセッションを実施し、当事者の生の声を社会に届けることが主たるねらいである。本稿ではその内容を報告し、障がいがあっても自分らしく生きることのできる暮らしやすい地域づくりのために必要なことについて若干の考察を加えた。

2. イベント概要

イベントの概要を表1に示し、関係機関への周知のために用いたチラシを図1に示す。

3. トークセッション内容

(1) 第一部

阿部(吃音当事者)：それでは始めさせていただきます。吃音の人生ということで自分自身、言葉をスムーズに話すことができないという吃音という障がいがあります。今日はその吃音について知っていただこうと思ってこのような会を開催させていただきました。今日の内容としてはまず自己紹介をさせていただいて、次に吃音とはどういう症状とか障がいなのかというものをしゃべって、自分がどのような人生を送ってきたのかということをししゃべった後に、熊田先生とトークセッションをさせていただこうかなと思っています。

表1 イベントの概要

イベント名	スペシャルトークセッション どもりながら生きる 吃音当事者と言語聴覚士の対話
主催	旭川大学短期大学部熊田ゼミナール
後援	写真文化首都「写真の町」東川町、東川町教育委員会
開催日時	2022年10月10日(月) 13:30～15:00
開催場所	せんとびゅあⅡ多目的室(北海道上川郡東川町)
参加人数	23名(定員は20名であったが、それを上回る参加希望があった)
参加者の職種等	保健師、保育士、教員、臨床心理士、議員、学生(小学生を含む)、当事者、当事者の保護者等
内容構成	第一部：当事者による自己紹介と自身の生い立ち等に関する報告 第二部：当事者と言語聴覚士によるトークと質問への回答

旭川大学短期大学部熊田ゼミナール@ひがしかわ

スペシャルトークセッション

どもりながら生きる

吃音当事者と言語聴覚士の対話



10月22日は国際吃音啓発の日



ことばがつかえてうまく話せない人が100人に1人います

吃音のことを知ってほしい

当事者と専門家によるタブーなしの本音トーク

10/10(月・祝)13:30~15:00

せんとぴゅあⅡ(ほんの森)多目的室

東川町北町1丁目1番2号

申込はこちらから



参加無料 定員20名 ※事前申込必要



阿部勇司 北海道ベースボールリーグ富良野ブルーリッジ選手 吃音の当事者

福岡県宗像市出身。沖縄大学人文学部福祉文化学科健康スポーツ福祉専攻卒業。保育士、障害者スポーツ指導員(中級)、健康運動実践指導者などの資格を持つ。小3から野球を始め、大学卒業後は福岡で発達支援の仕事に就くが、野球への夢を捨てきれずトライアウトを受け、富良野ブルーリッジへ入団。放課後等デイサービス事業所で指導員として働きながら野球を続けている。自らの吃音経験について語るイベントも積極的に開催している。



熊田広樹 旭川大学短期大学部幼児教育学科准教授 言語聴覚士 早期発達支援士

福島県郡山市出身。上智大学大学院博士前期課程外国語学専攻言語学専攻言語障害研究コース修了。北海道立子ども総合医療・療育センター(コドモックル)、東神楽町・東川町子ども発達支援センター(おひさま)にて言語聴覚士として勤務した後、2016年に旭川大学短期大学部に着任。子どもの発達支援を考えるSTの会運営委員、北海道乳幼児療育研究会理事、旭川市社会福祉審議会委員。月刊発達教育にて「暮らしの中でことばを育む」を連載中。

主催 旭川大学短期大学部幼児教育学科熊田ゼミ

後援 写真文化首都「写真の町」東川町 東川町教育委員会

お問合せ kumatahrk@live.asahikawa-u.ac.jp(熊田)

図1 イベント周知用のチラシ

まず、自己紹介からさせていただきます。名前は阿部勇司と言います。年齢は25歳になります。福岡県の宗像市というところで育ちました。現在は北海道にいて、富良野市で活動しています。仕事は上富良野町でしています。自分自身、今ユニフォームを着ているのですが、北海道ベースボールリーグというところで野球の選手をしています。北海道ベースボールリーグというのは全国からプロ野球選手になりたい選手たちが北海道に集結して、今シーズンは富良野と砂川と奈井江の3球団で試合をしていました。次の2023年シーズンから旭川ビースターズさんが加入されることが決まっています。拠点は旭川とその周辺の町も含まれていて、東川町も活動の拠点になっています。北海道ベースボールリーグ全体をもしよろしければ応援していただきたいと思っています。

次に自分の仕事ですが、野球選手をしながら放課後等デイサービスで仕事をしています。障がいがある子どもの支援をする仕事です。自分自身、吃音があるため子どもの気持ちを少し理解することができるので、そういったところを活かしながら働いています。資格は健康運動実践指導者というスポーツトレーナーのような資格、中級障がい者スポーツ指導員、児童指導員任用資格を持っています。最近、保育士も取得しました。



図2 当事者による自己紹介

次に吃音についてですが、吃音のある人は100人に1人くらいの割合でいると言われてい

ます。有名人で言うと、元総理大臣の田中角栄さんとか、最近ですと洋楽のエド・シーランさんなどがいます。吃音の治療法はまだ完全なものは見つかっていないそうです。こういう治療法が効果が出やすいといったものであったり、克服法というのは世の中にあるのですが、それが全員に当てはまるわけではないので完全な治療法というものは見つかっていないそうです。

次に症状の種類についてご説明します。症状の種類は、まず難発というものがあまして、最初の言葉が出てきにくい症状です。「……」と言葉がなかなか出てこなくて、「…ありがとう」みたいな感じになります。次に、伸発というものがありまして、「あーありがとう」みたいな、最初の言葉を伸ばしてしまうような症状になります。最後に、連発というものがありまして、「あ、あ、あ、あ、ありがとう」みたいな、最初の言葉を繰り返してしまう症状があります。この3つの中で自分は難発がよく症状として出ています。では、どうやってしゃべっているのかという話なのですが、自分は話す時の工夫として、まずリズムを取りながらしゃべったりしています。体のどこかを叩きながらしゃべることでスムーズに言葉を出しています。次に、「えっと」「あの」とかを使って助走をつけて、しゃべれるようにしています。また、あまり自分は知らないのですが、息を小刻みに「フーフーフー」みたいな感じで吸ったり吐いたりすることでリズムを作ってしゃべったりもしています。自分は高校生の時に、結構息でリズムを作りながらしゃべっていましたが、これはあくまでも自分が考えていることですが、克服方法は機能面とメンタル面の2つに分かれると思っています。機能面というのは滑舌をよくすることや発声練習のことです。メンタル面というのは、吃音に対して考え方を変えたり、イメージトレーニングで心を変えていくものです。自分は機能的な訓練みたいなことをあまりしたことがないので、今から取り組んでいこうかなと思っています。

次に吃音の人生ということで、今までの自分

の経験などをしゃべっていきたいと思います。

まず、小学校3年生くらいから吃音だな、というように感じました。もしかしたら3年生より前に言葉がつまっていたのかもしれないのですが、自分自身がスムーズにしゃべれないと感じたのが3年生くらいからでした。でも、小学生の時は割と目立ちたがりな性格で、よく授業の発表などをしていました。しかし、やはりつらいこともありました。野球チームでキャプテンをしていたのですが、号令をかけなくてはいけないのが、結構しんどかったという記憶があります。

次に、中学生の時は思春期ということもあったので、吃音だとばれたくないという気持ちがとてもありました。吃音でいじめられることはなかったのですが、からかわれたりすることはたまにありました。中学生の時に自分の友達が少しいじめにあっていて、それを自分がかばったりしていたら、自分の周りから友達がいなくなったという経験をして、そちらの方がつらくて、中学生の時に吃音で悩んだという記憶がありません。

次に高校ですが、野球部でも話すことが多くて、一度野球が嫌いになりました。例えば、ブルペンでピッチングをする時に「カーブ」とか「スライダー」というのがなかなかキャッチャーに言えなくて、結構しんどいなというのがありました。また、コーチに聞きたいことがあってもなかなか聞けませんでした。そのようなこともあり、高校野球が終わって一度、野球から離れました。高校生の時は、進学や就職活動に結構不安を感じていました。商業科だったので就職活動に厳しかったです。面接指導があり、やはりそこでも上手にしゃべれないので、結構しんどかったです。しかし、3年生の時にこのままではいけないと感じて、一人で沖縄の大学に進学しました。

大学生になりましたが、やはりそう簡単には変わりませんでした。カラオケ店でアルバイトを始めたのですが、なかなか変わらないなという感じで2年生くらいまでずっと過ごしていました。そして、ここからが分岐点になるのです

が、吃音がある大学の先生に出会いました。その先生は150人くらい学生がいる中で「自分には吃音があります」と告白していて、それを聞いて素直にかっこいいなと感じました。今まで吃音というものは恥ずかしいとか、自分の弱いところだなと感じていたのですが、その先生の姿を見て本当にかっこいいとか、自分もそのようになりたいな、と感じました。そこから吃音について勉強をしました。先ほどの吃音のある先生が心理学の先生だったので、その先生のゼミに入って吃音について勉強しました。勉強する中で考え方が変わったことがあります。「吃音があってもこれはできるのか」「吃音だからできないのか」というような感じで、今までは「吃音がある上で」物事を考えていました。吃音が自分の中の中心にあったのですが、それだったら人生あまり楽しくないな、ということに気付いて、そこからはやりたいことをやろう、と決めました。そして、目標を持って生きよう、と決めました。目標は1日の目標でも、長期的な目標でも、どちらでもよいのですが、何か目標に向かっていく時は自然と生き生きしますし、あまり吃音のことを考えなくても生活ができていくな、と感じたので、常に目標を持って生きよう、と決めました。そこで目標を1つ立てました。それが野球をもう一度始めるということでした。

そして、社会人になったのですが、社会人生活2か月で仕事を辞めて北海道に行きました。仕事を辞めると言うのと、やはり後ろ向きな気がするのですが、野球をするという目標を立てた時に、今所属しているチームからたまたま声をかけていただき、やりたいことをしよう、ということで今北海道にいます。放課後等デイサービスで勤務しながら野球選手をしています。元々、福岡でも発達障がい児の分野で働いていたので、北海道でもこのような仕事がしたいと感じていました。吃音を皆さんに知ってもらいたいという気持ちでこのようなトークイベントなどを開催しています。

(2) 第二部

熊田(言語聴覚士)：実は阿部さん、大学の授業でも先日ゲストでお呼びしまして、お話しいただいたのですが、大学の教室と今日とでは少し雰囲気違いますけれども、どうですか。

阿部：正直、ここの方が結構緊張してあまり言葉がスムーズに出てこなかったなという感じで、授業の方がうまくしゃべれたかなという感じですよ。

熊田：不思議なんですよ、だから。本人の話の中にもありましたけども、話せる時と話せない時とってというのがやっぱりどうしてもあって、これが吃音の大きな謎の一つですよ。

阿部：そうですね。

熊田：いわゆる吃音の波と言われていて、1日の中でも変わりますね。今のトークの中でも、序盤と中盤と終盤では滑らかさが少し違いました。序盤は少し出づらそうだなという感じはあったように思います。波は月単位でも繰り返すと言われてるので、これも本当に謎多きものだなと思います。ご自分の中でも先日の大学の授業の時と比べてそのように感じているのですね。

阿部：そうですね、感じています。ちょうど野球のシーズンが終了しましたが、変わり目の時期が結構精神的にしんどいというか、変わり目の時期に言葉が出にくいというのがあります。今日はちょっと出にくいなという感じでした。

熊田：それも含めて全て阿部さんなのですね。何となく季節の変わり目のようなものを自覚しているのですね。

阿部：そうですね、はい。

熊田：不思議ですよ。アレルギー体質の人などは割と季節の変わり目に弱かったりしますがけれども、そのような「体質的なもの」にも近い



図3 言語聴覚士との対話場面

ようなところがありそうですね。

参加者からの質問1

言葉が詰まった時に吃音の当事者はどう捉えたらよいのかを教えてくださいたいです。例えば客観的に捉えるとか、詰まった時のそれに対する捉え方はどのようにしていますか。

阿部：そうですね。詰まった時は、言葉をしゃべろうとしたら本当につまってしまうから、結構客観的に考えたりするようにしています。イメージで言うと監視カメラから見られてるような感じで、自分ではなくて場全体を考えるようにしています。すると意外とすっと出たりするのかなという感じです。

熊田：これは今まで考えたことがなかったですけど、カメラからの全体が映っている映像が思い浮かぶような感じでしょうか。

阿部：そうですね、はい。

熊田：どうしてそのようにすると、少し出やすくなるのだろうか。

阿部：やはり客観的っていうことを自分の中でよく考えるようにしていて、客観的に捉えることで、自分じゃなくなるというか。少し説明が難しいのですが、全体で、というように考

えると、吃音という不安が少し減るのかなという気がしていて、そのように考えるようにしています。

熊田：人間は何かしゃべっている時、もちろん何か言いたいことや人に伝えたいことがあって、言葉に気持ちをのせて話すわけだけれど、あえて1回それを少し排除するというか、1回クールに気持ちを少し切り離すみたいな感じでしょうか。

阿部：そのような感じでしゃべっています。

熊田：少し機械的というか、事務的というか、そこに気持ちをのせないで、なんとなく言葉だけ出すようなイメージで捉えるという感じでしょうか。

阿部：はい、そのような感じです。

熊田：不思議ですね。逆に言うと、たくさん気持ちをのせようと思った時に、つまることが多いのでしょうか。そうとも限らないのですか。

阿部：そうとも限らなくて、これを伝えたいという気持ちが強いとスムーズに言えることもあって、言葉がつまってしまうという気持ちよりもこれを伝えたいという気持ちが上だったら、言葉はあまりつまらないのかなという感覚です。

熊田：なるほど。先ほどの阿部さんの話を聞いて、中盤以降のところで吃音のある大学の先生の話が出てきたところで、やっぱりここは言いたいところなのだという場面ですーっと言言葉が出ていたのですよね。言いたいことがあるのだけれど、まだ何となく自分の中で少し煮えきらない時とか、まだこれは100パーセントの自信がないという感じのところは言葉にする時に少し難しさがあったりすることもあるのでしょうか。

阿部：そうですね。そのような感じですよ。

熊田：しかし、これも一概に言えないのですよね。

阿部：そうですね。

熊田：ある程度、法則性はあったとしても、そうならない時もあるということは、吃音を考える時の謎ですよ、いつも。単純に法則化できないという。

参加者からの質問2

吃音に対する当事者と周囲との理解の違いを知りたいです。当事者はこう理解しているけど、周りはこう捉えているなどのギャップに悩むことがあるのかなと想像しています。

阿部：例えば言葉につまんでいる時に、配慮してくれるという人は今まで結構いました。自分の中でこうしてほしいんだけどな、という思いは、結構ありました。しかし、吃音関係のこのようなイベントなどを開催していて気付いたことがあります。人それぞれ配慮の仕方は違うけれど、配慮してくれているということに素直に喜ぼうというふうに決めてからは、この人はこの人なりに自分のことを考えてくれているのだなというところに目を向けるようになりました。ギャップなどを感じる時は感じるのですけれど。

熊田：それは別に吃音とかに関係なく、いろいろな経験をされてとても人間的に大きくなられたという感じですよ、私が言うのも変ですが。例えば思春期の吃音の方の相談などでよくあるのは、友達と一緒に外食に行って、ハンバーガーを注文したいのだけれど、ハンバーガーの「ハ」が出にくいから違うものを注文したというような話です。そのような時に、例えば指をさして答えられるような配慮など、こちら側の提供できる配慮というものはあるわけですよ。

が、それを望む人とそうでない人がいますね。ですから、吃音への合理的配慮と言っても、基本的にはその人の気持ちに沿うものでなければいけないわけです。しかし、阿部さんはそこはどのような配慮であってもやっぱりすごく考えてくれているのだという大きな気持ちで受け止めているという感じですよ。吃音に対する当事者と周囲の理解の違い、って言うと言葉が出にくい時の苦しさみたいな、そういう意味もあるのでしょうか。すごくつまって言葉が出ない時の苦しさは、本人が感じているものと、周りから見えるものとで違いがあるといったような。そのあたりはどうでしょうか。

阿部：そうですね。やっぱり吃音ではない方は吃音という感覚はやはり想像しにくいのかな、というふうに自分は感じています。でも、それを少しでも感じていっていただきたいなというように考えているのですけれど、いい例えがあまり思いつかないのです。自分が説明する時には、「普通に走っていて次に踏み出したら絶対転ぶというのを知っていても、スムーズに足が出せますか」というような例えをよくしています。吃音もそれと似ていて、この言葉を話したら絶対つまるといのがわかっていて、言葉をしゃべるまでにどんどん不安が積もって行って、そこに行ったらやっぱりできないという感覚です。

熊田：とても想像しやすい例えかな、と思いますけれど。予期不安みたいなものですよ。 「来る、来る」とわかっているけど、やっぱりつまみたい感じがですね。別の当事者の方が、言葉を話す時に自分が話す次の次の文ぐらimageできてしまうというようなことをおっしゃっていて、何かそれととても似ているなという感じです。しかし、不思議です。先ほど、阿部さんは用意してきた台本を読んできていたのですが、対談、対話になると、また少し言葉が違いますよね。

参加者からの質問3

私は人と話さない期間が長くなると、軽い吃音が出ることがあります。たいいてい昔、演劇でやっていた発音練習で治りますが、阿部さんはいかがでしょうか。

熊田：阿部さんは機能面について本格的に何か取り組んできたことはなかったとおっしゃっていただけれども、野球で息の使い方とか工夫したこととかあれば教えてもらってもいいですか。

阿部：例えば体を叩きながらしゃべるとか、息を「フーフー」みたいにリズムを取るとかいうように工夫していました。高校時代、野球部でバッティングマシンにボールを入れる作業があり、その時に絶対「いきます」と言ってからボールを入れなければならないのですけれど、それがなかなか言えないから「フーフー」と息で整えてから「フーフー、いきます」みたいな感じでやっていました。

熊田：それは自分で工夫をしたということですよ。誰かから何か言われたわけではなく、自分で叩いてリズムを取ったり、呼吸で整えて「いきます」と言ったりとか、自分で工夫をしてみたってことなのですね。以前、スポーツをしている当事者の方がいたのですが、キャプテンが「集合」とか号令をかけなくてはいけないので最初の音が出づらくて大変という話がありました。バッティングのマシンも、相手のペースで言わないといけないですね。自分のペースではなくて相手に合わせないといけません。いわゆる訓練法みたいなものとか、機能面について何か自分に合うものを研究中かと思いますが、例えば、いわゆる吃音のセラピーでは楽にどもるといことがなされることがあります。例えば「おはようございます」と言う時に「(フオ) おはようございます」みたいに最初を少し柔らかい話し方にするとか、「おーはようございます」のように少しだけ伸ばすとか、ゆっくり話すとか、言葉が出づらいつきに軽く楽に

どもって少し出しやすくするという方法がありますが、そのあたりに関しても、きっとセラピストが勝手に決めていいことではないような気がしています。そういうことをある程度自分で習得してでも言葉を楽しみ出せるようにしたいと思う人もいれば、なんとなくそういうのは自分の言葉ではないような気がするという人もおそらくいて、阿部さんはそのあたりはどのように考えていますか。

阿部：そうですね。自分自身、小学生くらいの時に吃音だなど感じてから、ことばの教室とかには通っていませんでしたし、例えば言語聴覚士さんから言われて何かやってみるといことがなかったの、自分にとっては想像しにくいことですね。

熊田：いろんな人がいますよね。例えば、就職の面接とか高校入試の面接とか、そういう人生の一大イベントの前に少しでも言葉がスムーズに出せるようにしたいという人もいますね。

参加者からの質問4

幼児期・学童期の吃音によるいじめ、からかいについて何か思うことはありますか。また、吃音は障がいの分類に入るか、入らないかについて教えてください。

熊田：障がいの分類に入るか入らないかというのは制度的なことや医学的な分類といった話であれば、主観的な話というものもあると思います。いじめ、からかいのことは、学童期・思春期の主要なトピックになると思うのですが、阿部さん自身はそういった経験がないということでした。例えば当事者同士のつながりの中で、いじめ、からかいについて何か思っていることはありますか。

阿部：小学生の時は、結構自分を表現していました。振り返った時になんで自分は吃音でも普通にやっていたのかなと考えたら、小学生の時

からスポーツには自信があったので、別にしゃべれなくても、自分はスポーツができるんだ、みたいな感じだったのかなと思っています。小学生の時に「何、そのしゃべり方」とか、からかわれた経験というのはあるのですが、それを返すくらいは何か違う自信がたぶん小学生の時にはあったのだと思います。でも、やはり中学生になると思春期で周りの目を気にし始めたりして、吃音のネガティブな感情がどんどん積もっていったので、学校でもからかわれたり、「本当、言葉出ないよね」とか言われたりした時は結構傷ついていたなという感じでした。それでも、やっぱり自分には野球というものがあって、そこで自分を表現できていたのかなという感じでした。たぶん、自分自身いじめとかはされていないのですけれど、されたとしてもそれを超えるような自分の自信であったり、何か好きなものとかがあれば強くなれるのかな、と自分は考えています。

熊田：ありがとうございます。今回は療育に関わっている方や学校の先生もいらっしゃるわけですが、療育も教育もやはりその人間全体を見るところが大切です。症状とか機能面のことだけを見るのではなくて、その人、人間全体を見ていった時にやはり阿部さんの場合、野球というものが一本、自分を支えてきたものとしてあるということですね。その生きる姿にきっと勇気づけられる人もいるのではないかなと思いますので、どんどんまた発信してほしいなと思います。表現ですよ、一つの。表現を何か持っているということですよ。きっと阿部さんの場合は野球が表現なのだろうなという感じですね。吃音は障がいの分類に入るか、入らないかというあたりは、障がいとは何かという結構大きなテーマになってくるわけですが、制度上は発達障害者支援法という法律の中に吃音も含まれておりますし、医学的な診断分類というものがありまして、その中でも当然、吃音というものはあるわけです。ですから基本的に配慮を求められたら提供しなければならないというのは障害者差別解消法という法律

の中で定められているわけです。ただし、広く障がいということ考えた時に、障がい障がいでなくなることもあり得るわけですよ、環境によっては。阿部さんが考える吃音が障がいでなくなる、障がいだけれども障がいでなくなるような町づくりであったり、地域づくりだったり、こういう環境だったら居心地がいいな、ということは何かありますか。

阿部：まずはやはり、吃音というものがどういう障がい知ってもらおうというのが本当に大事だなと感じています。よく個性とかって言いますが、その個性を理解するためにはそれについてやはり知らないといけなないので。たぶんここに来てくださっている方は何かしら吃音というものを知っていたから来てくださったと思うのですが、何も知らない人というか、吃音という言葉も知らない人にも知ってもらうようにしていかないといけないなと思っています。たぶん野球のチームメイトなども、みんながみんなではないですけど、ずっとスポーツしかしてきていないので、あまり吃音とかを知らない人たちがいました。それでも、自分が1人そこにいることで「あ、こういう障がいなんだ」というように知ってもらえたので、知ってもらおうということが今は一番大事なのかなと感じています。

熊田：ありがとうございます。やはりそれが基本ですよ。正しく理解をする、正しい情報を得て、当事者の声に耳を澄ませて正しく理解をしていくところからなのかな、とやはり思います。吃音の方と言っても、吃音であることがわかりづらい人もいます。阿部さんは積極的に自分から発信をしてくださっていて堂々ともっているから、吃音とはこういうものなのだなということがわかるけれども、大人になってくると、どもる自分を隠している人もいますし、しゃべらないから吃音だと気付かれないままの人もいたりします。わかりづらいですよ、そういうところは。そういう人もいるのだということも正しく理解するということにつな

がると思います。たぶん療育関係者や学校の先生はきっとご存知だと思いますけれど、実は吃音には長い誤解と偏見の歴史があるのです。20世紀にアメリカを中心に研究が進んでいったのですが、例えば左利きを矯正するのをやめたら吃音が治ったからそれが原因だという説もありました。最初は自分がどもっているということに気づいていないのだけれど、それを「君のそのしゃべり方は吃音だ」ということを診断したが故に、それがきっかけで吃音を発症するという診断起因説というものもありました。母親の育て方のせいという誤解もありました。しかし、今は当事者の方が研究者になったり、言語聴覚士になったりしています。あるいはいろんな発信をしてくださる方が出てきて、かなりオープンに吃音のことを話せるようになりました。

参加者からの質問5

1歳児担当の保育士です。この時期は、言葉が少しずつ増えてくるタイミングだと思いますが、吃音のように言葉につまってしまう子どもや言葉がゆっくりな子どもなど一人ひとり違います。乳児期に保育教諭はもちろん、保護者の方も大事にした方がいいことなども学べたらうれしいです。

熊田：阿部さんは小学校3年生くらいの時に吃音に気付いたと言っておりましたが、医学的な観点から言えばおそらくもっと早くに発症はしていたのでしょうか。一般的には2歳から5歳くらいの間に発症することが多いと言われていいますので。吃音は例えば3歳児健診などで気づかれたりすることもあるわけですが、吃音のある小さい子どもと関わる人に何か伝えたいことはありますか。

阿部：そうですね、当事者の考えとしては、言語聴覚士さんなどと関わって改善につなげてほしいというのが正直な気持ちです。自分自身も2歳から5歳くらいの時に吃音が出ていたかはわからないのですが、そのような支援をあ

まり受けてこなかったから治らなかったのかなと考えることもあります。それは自分の考えなのですけれど。自分も小さい時に何かそういった支援とかを受けたかったなという気持ちがあるので、もしそういったお子さんとかがいれば、しっかりと専門機関と関わって改善に導いてほしいなと感じています。

熊田：阿部さん、正直に語ってくれましたよね。なかなか言えないなと思います。大人になって、前向きに発信して生きている中でも、本当だったら支援を受けたかったというようなことは、ある種、本音なのでしょうけれど、自分の生い立ちを否定することにもなるから、なかなか言えないことだなというように思いながら聞いていました。とても正直な方だなと思って聞かせていただきました。まだ吃音に対する決定的な治療法はないわけです。医学的な原因がまだはっきりとわかっていないからですね。では何もできないかということ、そうではなくて、言語聴覚士もそうだし、ことばの教室、通常学級の先生方、幼稚園、保育所の先生方もみんなそうだけれども、やはり吃音をオープンに相談できるような雰囲気を作ったり、その環境を整えたり、あるいはどもりながらもその子どもの全人格が受け止められていくような相談援助体制や環境を整えていくということは決して吃音を悪化させる方向にはいかないということはわかってきています、少なくとも。いろいろな人の力でそこは整えていきたいなというふうに思いますし、阿部さんからも何か正直なメッセージをいただいたような感じで、頑張らねばというところです。

参加者からの質問6

メンタルを変えるっていうふうにおっしゃっていたのですが、変える前のメンタルと、意識して変えた後のメンタルというにはどんなことがあるのですか。

阿部：そうですね。自分がしているのは瞑想み

たいな感じで、目をつぶってスラスラみんなの前でしゃべれている自分をイメージして実際にしゃべるといような感じで取り組んでいます。想像したことがリアルになったら、これは本当に成功したのだと自分も錯覚するので、その自信を使って実際の行動に移していくという感じのことをしています。

熊田：なるほど。それは野球のメンタルトレーニングみたいなものから応用した感じでしょうか。うまくヒットを打てる自分をイメージするみたいなものを応用したという感じですか。

阿部：はい、そんな感じです。

熊田：さっきの予期不安と逆ということですよ。予期不安が起きて、「ああ、だめだった」ではなくて、うまくいく方をやってみて、それで仮に偶然だとしてもうまくいったらなんとなくそれが自信になるという方に捉えていくということですね。いろいろ工夫されていますね。

参加者からの質問7

なんにも原稿がなかったり、フリーな状態でしゃべる時に、思った言葉が出ないということもあるのでしょうか。逆に朗読というのはどうなのでしょう。朗読する分には全く支障はないのですか。それとも朗読でもそういう出にくい発音とかっていうのはあるんですか。

阿部：そうですね。それも全部環境によって変わるかなと思っていて、以前朗読をやったのですが、その時ステージで光があったので、あまり観客が見えなくて、スラスラしゃべれたというのを感じたことがあります。しかし、リハーサルは観客もあまりいないけれどスムーズに出なかったということがありました。話す内容とかではなくて、もう全て環境なのかなと感じます。

熊田：なるほど。不思議ですよ。音読で読める人もいればそうでない人もいます。しかし、それも環境による、みたいなどころもあるわけです。以前、言語の学会で福岡に行った時に、北九州の芥川賞作家の方が特別講演で語ってくださいました。その方も吃音の当事者なのですが、芥川賞作家ですからテレビ番組とかラジオ番組とかに出ることもあって、今日はどうもそうとか、今日はどうも話せそうというのが、何かその会場の雰囲気でわかると話されていて、それがとても印象に残っています。今、阿部さんは環境が全てって言いましたけれども、何かそれとちょっと相通ずるところがあるなと思いました。実は今日このトークしている場所も台を置いて一段高くしようかと話していました。台があるので、用意して持ってきた方が後ろの座席の方が見やすいかなと思ったのですけれど、座ってみた時にこのままの方がいいかなと思ってあえて高くしなかったのですけれど、正解だったでしょうか。

阿部：それもなんとも言えないのですよね。もしかしたら高くした方がしゃべれたかもしれないというのがあります。

熊田：不思議ですよ。だから言葉というものは環境と切り離せませんね、やはり。

阿部：はい。

熊田：小さい子どもなどは、まさにそうかもしれないですね、余計に。

参加者からの質問8

当事者です。もう今は40代になるんですけど、小学生の頃からのエピソードが、自分とすごくかぶっていて共感できました。質問というよりは僕の体験なんですけど、弁論大会とか、最初の音が出てこないというのがすごくあって、やっぱりその時もすごくしんどくて。もう全然話にはならない

というか。あと、卒業式とかも名前を呼ばれて「はい」というその一言が言えない。このようなことは小学校、中学校、高校とずっとあったんですけど、こういう場でよく感じるのは、最初に話す場面になった時に会場の目が気になるんですよ、その雰囲気。評価を気にしてしまうというか、成功するのかもしれないのか、どう見えてるのかとか。そのような時にすごくどもりやすくなるんですよね。僕が感じたのは、最初に話し出した時に承認されるというんですかね、「ああ、そうなんですか」というその頷きのジェスチャーがあった時にすごく気が楽になって、どんどん話せるというのを当事者としては感じていて。阿部さんも、承認された時に結構スラスラと話されてるので、やっぱりそういうところも同じなのかなと思いました。僕も仕事上、社員さんの前とか、人と話すことがあって、その時も、僕は僕の仮面をもう1個持ってるとい認識でいるんですよ。本人、当事者だと、すぐどもるので。そうではなくて、もう1人の自分がいて、そいつがしゃべってる。すると僕は楽になります。今も結構スラスラしゃべってる方なんですけど、もう1人の自分が今話してます。それが逃避っていうふうを受け取られてしまうかもしれませんが、いろんな方法を考えてきたんですよ。いかに自分がどもらないで済むかという方法を。というように、探り探り今に至るっていう、なんてことない話です。

熊田：先ほどのカメラから見た自分というのと少し通ずるところ、似ているところもあるかなと思いましたが、どうでしょうか。

阿部：自分も先ほどパソコンを見ながらしゃべっていたのですけれど、それよりは皆さんを見ながらの方がスムーズにしゃべれたというのもあるので、「ああ、聞いてくれているんだ」と自分自身で感じる事ができれば、しゃべりやす

くなるのかなと今、お話を聞いて思いました。

熊田：そこに言葉があるわけではないし、何か向こうから返ってくる言葉があるわけでもないのだけれど、何か空気であり、頷きなどの非言語であり、表情であり、そのようなものが返ってきているということもやはりあるのかもしれないということですよ。

阿部：はい。

熊田：ここは私たち、いわゆる支援者と呼ばれている人たちも心に置いておきたい部分だなと思いました。今日も実はオンラインでつながらないのですか、と本州の方から言われたのですが、今日はそのようにするつもりはないのですと伝えました。今日は少人数の顔の見える関係で、ささやかな感じでやりたいのですという話をさせていただきました。根拠はないのですけれど、今回そこにはこだわっておりました。何か今の話とちょっと通ずるところがあるのかな、と思いました。実はもう少し大きな会場もありました。しかし、この部屋がいいなという感じがしておりました。あまり距離が離れているところよりもいいかな、と思ったりもしました。でも、それもわからないのですよね、当事者からすると。あくまで私がそう思ったというだけであって。

阿部：はい、わかりません。

熊田：ありがとうございます。以上でこのトークイベントを終了とさせていただきたいと思えます。どうもありがとうございました。

4. 参加者アンケートの結果と考察

参加者にはアンケートを実施し、イベントの満足度を大変満足、満足、普通、やや不満、不満の5段階で回答してもらった。回答者は20名（参加者全体の87%）であった。結果を図4に示す。

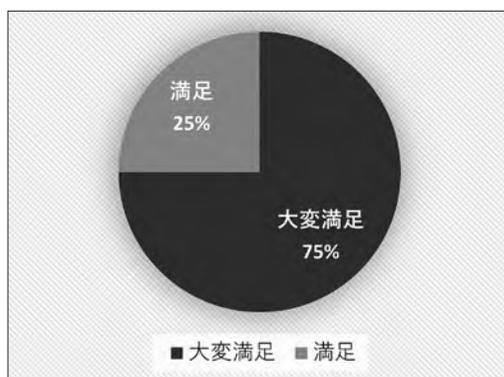


図4 イベントの満足度

回答者全員が大変満足もしくは満足と回答しており、イベント全体の満足は大変高かったと解釈してよいと考えられる。

また、アンケートでは自由記述としてトークセッションの感想や、今後開催してほしいイベントや学習会の希望なども回答してもらった。その中から、一部を抜粋したものを表2に示す。

表2 アンケート結果（自由記述）

トークセッションの感想

- ・吃音症についての正しい情報や知識を持っていなかったのが知ることが出来て良かったです。こんな人もいるんだ、と理解の幅が広がりました。
- ・吃音については短大時代に学びましたが、当事者の声は聞く機会がなかったのでとてもよい勉強になりました。特に、その時によって波があることを知りました。現在、私も保育教諭として子どもと関わっていますが、その子の個性をまずは認める大切さを感じました。
- ・今、子どもと関わる仕事をしていて、環境を整えるという言葉を使うことがあるのですが、私たちの思う整っている環境と、子ども自身が感じる整っている環境が違っているのかもしれないと感じました。一番大事にすべきことは子どもが苦にならない

ような環境を作ることだと改めて感じる事ができました。子どもと保護者の気持ちを大切にしながらこれから関わっていききたいと思いました。

- ・初めて吃音当事者の方のお話を聞きました。何が正解かわからない、との素直な言葉に「なるほど」と感じた部分と、同時にもっと知りたいと思いました。どんな人にも心地よい環境を作れるような支援者になりたいです。

今後開催してほしいイベントや学習会

- ・吃音の方のお話とその保護者のお話も聞いてみたいです。
- ・当事者の親としては大変参考になり、感謝しています。グループで話し合いをすることも皆が会話できるチャンスかなと思います。機会があれば親の話も聞いてみたいです。
- ・いろいろな方に知っていただきたいので、小規模でも同イベントを継続していただけたらうれしいです。
- ・当事者に話してもらってイベントを大人数でも開催してほしいです。
- ・吃音とわかったときの支援について、あるいは周りの人間はどうかかわるのがよいのかについて学ぶ学習会を開催してほしいです。
- ・吃音についてももっと知りたいですが、言語聴覚士の方の仕事やどのような活動をしているのかについても、もっと知る機会を作ってもらえたらと思います。発達支援センターについても関係者以外の一般の方々にはあまり知られてないように思います。
- ・さらに踏み込んだ吃音に関する学習会や、発達・療育に関する様々な学習会を希望します。
- ・(吃音に限らず)いろんな当事者がいらっしゃるの、その思いをトークで引き出してほしいです。
- ・言葉が遅い子どもや気になる子どもについて学びたいです。
- ・発達障がい関係について学びたいです。
- ・場面緘黙症を取り扱った学習会などがあれ

ば参加したいです。

自由記述からは、本イベントの目的でもあった、障がいに関する正しい理解を図ることがある程度達成できたことが推測される。また、障がいのみに目を奪われるのではなく、人間全体を見ることや本人を主体として配慮を考えることの重要性を共有することができたと考えられる。吃音への関心は想像以上に高いことが伺われたが、吃音に限らず様々な当事者の声を社会に届けていくためのイベントを希望する声もあり、今後の短期大学による地域貢献や地域づくりへの参画を考える上で、大変参考になる意見をいただくことができた。

療育は本人への支援、家族への支援、地域連携の3本柱から成り立つ。言い換えれば、療育にも地域づくりの視点が欠かせない。障がい当事者やその家族だけが関わる療育にとどまるのではなく、療育自体が積極的に地域に発信をし、声を上げたくてもそうできない人々の声を社会に届けていくような「動く療育」もこれからはますます必要になっていくと思われる。本イベントがそのための契機になることを願うものである。



図5 参加者に配布されたグリーンリボン

謝辞

本イベントの開催にあたっては、東川町職員の方々にご協力をいただきました。この場をお借りして心より感謝申し上げます。



図6 阿部さんと熊田ゼミナールでの集合写真 ※背景は学生がデザイン・制作した

熊田 広樹 阿部 勇司